

社会科学学習指導案

令和5年9月 日

1 単元(題材)名

歴史との対話を未来に生かす

2 単元(題材)設定の理由

①生徒観

本学年の生徒たちは、一問一答のような基礎的な「知識・技能」はある程度習得できている。しかし例えば「下関条約はどのような条約か」といった概念的な理解を要する問いは得意ではない。この原因として、「思考力、判断力、表現力等」の育成や、「学びに向かう力」の涵養がまだまだ十分でないと感じている。そのうち、まずは思考力、判断力、表現力等の育成に重点を置いて、学習活動を展開しているところである。

②教材観

平成29年告示中学校学習指導要領では、歴史的分野を通して育むべき思考力、判断力、表現力が、「歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力」と定義された。

過去の思考力、判断力、表現力等をめぐる教育実践では、思考力を育てられるかどうか、そのためにはどのような方法をとるべきかという視点で語られることが多かった。しかし、近年では、単に思考力を育てるかどうかではなく、その質的な違いに注目して、育成を図っていくべきという考えが多く唱えられる。例えば、石井(2014、2015)は、諸研究を検討し、学力・学習の質がおおむね三層で捉えられているとし、学校で育成する資質・能力の階層性や要素を提案した。原田(2018)は、石井の提案に社会科の

表1 5つの枠組みの主目的とカテゴリ構成の違い(石井, 2014)

枠組み	「改訂版タキノミー」	「学習の次元」	「新しいタキノミー」	「知識の構造」	「知の深さ」
主目的	目標・授業・評価間のアラインメントの検討	思考教授の方法の選択と組織化	目標の具体化と評価法の選択、思考スキルのカリキュラムの設計	カリキュラムの精選と構造化	目標・評価間のアラインメントの検討
認知的階層性に関わるカテゴリ	記憶する	知識の獲得と統合	再生	事実的知識／個別的技能	再生
	理解する	知識の拡張と洗練	理解	転移可能な概念／複合的なプロセス	スキル／概念
	適用する		分析 知識活用	原理と一般化(永続的な理解)	方略的思考 拡張された思考
	分析する				
	評価する				
	創造する	知識の有意義な使用			

知見を活かしたカリキュラムの構造化モデルを提案している。こうした提案の特筆すべき点として、次の三点があげられる。すなわち、資質・能力の階層性や要素を明らかにし、高次の資質・能力の育成を図る重要性を訴えていること、高次の資質・能力の育成のためには、真正性

の高い課題を大きなまとまりごとに取り組ませること、真正性の高い課題に向けて学習内容を構造的に、逆向きに設計することである。

学習指導要領や諸研究を踏まえて、3年生の歴史的分野の学習教材を見たとき、近代から現代までの期間は、今日まで続く様々な「歴史に見られる課題」を有する時代である。そのため、今日の世の中にもつながり得る、真正性の高い課題設定を通して高次の資質・能力の育成が図りやすい内容といえる。また、世界各地で様々な事象が発生し、かつ多くの歴史的事実が明らかになっていることから、歴史に関わる事象の意味や意義などを、多面的・多角的に考察する機会を多く設けられ、学習内容を構造的に設計できる。

③指導観

今回の学習は、3年間の歴史的分野のまとめとして、「歴史との対話を未来に生かす」と銘うって単元を設計し実施する。1学期に行った近代から現代までの学習を改めて振り返り、今日まで続く「歴史に見られる課題」を再度活用して、公民的分野の学習につなげていきたいと考えた。

真正性の高い学習課題として、まず今日の世の中にもつながり得る、「もし大戦を止められたとすれば、どのタイミングだったと思うか」、そして、それを活かして今日の世の中を考えるため、「私たちはどのように平和を模索していくべきだろうか」の二つを設定した。なお、該当学級以外は1学期の近代の学習単元のまとめとして、同様の学習課題を実施している。

思考力、判断力、表現力等の育成をめざし、本授業を実施するにあたって、次の点に留意したい。一つ目に、学習課題を吟味する際に適切な問い返しを行うことである。カリキュラムの構造化モデル（原田）によれば社会科の学習で最も高次の思考・判断は価値的思考・価値判断である。学習課題を通して生徒の価値観を表面化し、揺さぶるよう問い返しを行うことで、こうした資質・能力の育成につながり得る。

二つ目に、学習課題に対してどのような考え方をしているのかを明確にしながら指導を行うことである。日頃から考え方の類型として泰山（2014）の「思考スキル」を採用

表2 カリキュラムの構造化モデル（原田, 2018）

目標の柱 学力のレベル		知識	技能	思考・判断/表現	情意・態度
見 方	知識の獲得 (知っている)	事実	情報読解	事実に基づく思考・ 事実判断	素朴な興味・共感 異なる見方への関心
				記述	
考 え 方	意味の理解 (わかる)	概念	探究方法	理論的思考・推理	文脈や根拠の吟味
				説明	
	活用・創造 (使える)	価値	提案	価値的思考・ 価値判断 議論・意思決定	自己の考え方の構築

し、生徒と共有しながら学習を進めるよう心掛けている。今回の課題では、「評価する」「理由づける」「具体化する」ことを取り上げ、学習内容の振り返りと合わせて指導をしていきたい。とりわけ、学習課題と学習内容がつながるよう「理由づける」「具体化する」ことに力を入れる。

本学級以外の3クラスでは、三つめに、ヨーロッパについての学習内容を充実させることで、多面的・多角的な生徒の思考につなげることをめざした。とりわけソ連について重点を置き、ミュンヘン会議を学習内容に追加した。本学級でも、同様に1学期にこれらの内容を実施しているので、それらを的確に振り返りながら、課題に挑ませたい。

3 単元(題材)の目標

- ・第二次世界大戦はどのように始まり、日本と欧米諸国の関係はどう変化していったのか、また、戦争はどのように展開し、人々の生活はどのように変化したのか理解する。
- ・世界各国の思惑と動きに着目して、二度目の世界大戦が起こった理由やその戦争の影響を多面的・多角的に考察する。
- ・よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとする。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第二次世界大戦はどのようにして始まり、日本と欧米諸国の関係はどう変化していったのか、また、戦争はどのように展開し、それによって人々の生活はどのように変化したのか理解できる。	世界各国の思惑と動きに着目して、大戦が起こった理由やその戦争の影響を多面的・多角的に考察できる。	よい社会の実現を視野に、歴史的課題を主体的に追究しようとしている。

※該当学級のみ違う時期で実施しているため、代替課題を設定し、不平等にならないよう1学期の評価を行っている。

5 指導計画

第1次 はじめに・・・1時間

- ・学習課題と、近代の重要な語句や時代の大まかな流れを再確認する。

第2次 学習のまとめ1・・・1時間

- ・もし大戦を止められたとすれば、どのタイミングだったと思うか考えることを通して、戦争（大戦）が起こる理由を多面的・多角的に考察できる。

第3次 学習のまとめ2・・・1時間

- ・前時に考察した、戦争（大戦）の時代と、今日の世界情勢との類似をあげながら、平和に対する手立てを考える。

6 本時

(1)目標

- ・もし大戦を止められたとすれば、どのタイミングだったと思うか考えることを通して、戦争（大戦）が起こる理由を多面的・多角的に考察できる。【思考・判断・表現】

(2)展開

時間	学習活動	指導上の留意点	学習活動における具体の評価規準	評価方法
5分	○近代の出来事を振り返る。			
	もし大戦を止められたとすれば、どのタイミングだったと思うか			
15分	○初めの考えをまとめる。	○立場を明確にし、簡単な理由を添えさせる。		
15分	○考えを共有する。	○ある程度出揃ったら価値観に迫る問い返しを行う。		
15分	○終わりの考えを表明する。	○立場を明確にし、理由付けるよう指導する。 ○理由に具体的事例を使うよう指導する。	B 歴史的対象を正しく理解したうえで、それを根拠として立場を明確にし、論述できる。	ノート記述 3つの考え方を読み取る。

(3)評価及び指導の例

「十分満足できる」と判断される状況	いくつかの歴史的事象を正しく理解し、それらを正しく根拠として、学習課題について立場を明確にし、論述できる。
「おおむね満足できる」状況を実現するための具体的な指導	いくつかの代表的な歴史的事象を板書し、それらが根拠として使えるか、個別に問い直す。

7 参考文献

- 石井英真 「高次の学力の質的レベルを捉える枠組み：N. L. ウェブの『知の深さ』を中心に」
京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座『教育方法の探究』第 17 号
(2014) pp. 25-32
- 石井英真 『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準(2015)
- 原田智仁 『中学校 新学習指導要領 社会の授業づくり』明治図書 (2018)